

様式第2（第9条関係）

政 務 活 動 費 成 果 報 告 書

令和7年 11月17日

犬 山 市 議 会

議 長 大澤 秀教 様

議員名 鈴木 伸太郎

下記のとおり、セミナー・現地調査の成果を報告いたします。

(1) 年 月 日	令和7年 11月 16日(日)
(2) 場 所	
(3) 形 態	会派 () : その他 (鈴木のみ)
(4) 内 容	セミナー「マイクロライブラリーサミット」 現地調査 いくPAの図書館 サイクル ジオタワー十三 本の部屋 T O N T O N 報告書別紙
(5) 成果・提言	報告書別紙



出張報告書 令和7年11月16日（日）

大阪公立大学森之宮キャンパスで開催された「マイクロライブラリーサミット 2025」
に参加、このイベントは、まちライブラリー（私設の小規模な図書館はじめ、街なかで主に民が主体となって展開する図書コーナー。そこに人が集い、本を通してさまざまな意見交換、情報共有、つながりづくりを展開する）の実践発表会。今回は愛媛、関西、茨城の各団体が発表した。

以下、主な発表団体

○まちライブラリー@みなとじま

神戸ポートアイランドのシャッター街を再生するために、この街で生まれ育った女性が立ち上げた。こどもの居場所の復活がきっかけ。地域ボランティアで運営、ひと棚オーナー、各種イベントも開催。近隣のクリニックが支援。大学ともコラボ。

○本の部屋 TONTON

大阪市阪急中津駅前。賃貸アパートにアップサイクルをテーマとしたさまざまな店舗が入居。TONTONはそのひとつ、7畳の狭いスペースで展開。地域からの寄贈本、病院内の本、処分される予定の本を集めた。「本の延命」がテーマ。サンジョルディの日のイベント、読み聞かせイベント等展開。

○シェアスペースみぎわ

水戸市、診療所の後、築70年。「ひとりでも大丈夫」「休職・引きこもり」に対応。目的は賑わいづくりではなく、個への対応。大学生が卒論のテーマにするほど。ワインの会、大学教授が、学内でできない講義（ドラクエ研究、ファイナルファンタジー研究等）を開催。広義の福祉（地域のつながり、地域のハッピー）を探索。

○いよ本プロジェクト

伊予市。坊ちゃん読書会、俳句の街でもあり、句会、俳句と絵のコラボなども展開。俳句と絵のコラボ。古本交流会、市民のおすすめ本や本に対する声を一冊にまとめた本を刊行。

○姫路城下町 町衆のライブラリー

江戸時代の町屋を改築、喫茶とフリースペース併設の複合施設。「姫路町屋再生塾」の拠点、町衆のエネルギーを産み出すスペース。自分たちの住む街は自分たちで作る、の気概。

○いく PA の図書館～ふくろうの森～

生野区、コリアンタウンに所在。廃校した旧小学校校舎内に立地。生野区の人口の23%が外国~~語~~多言語絵本、外国語図書の広場充実。母国語支援、外国ルーツの若者の就職支援、日本語学習にも取り組む。地域の多文化共生の拠点でもある。

○まちの保健室 陽の芽

医師が運営、メンタルヘルス診療対応。大人食堂ランチ会、健康相談、ミニ農園展開など、高齢者の居場所づくりに主眼。

○念々堂

お寺の住職かつ脳神経内科の医師が展開。老人ホーム併設、高齢者の暮らしと共にある図書館。肩書や経歴を超えた人間関係作りを主眼。

午後は大阪市内の「まちライブラリー」の現地調査。以下のとおり。

○いく PA の図書館～ふくろうの森～

サミットで聴講した図書館の実際を見学。桃谷駅から徒歩15分。コリアンタウンがすぐその多文化共生色の強いエリア、廃校した旧小学校に立地。旧小学校時代の図書館をそのまま活用しており、壁面、書棚とも充実。とりわけ、多言語の絵本に力を入れていた。内装は森をイメージ、ボランティアで木材による装飾を壁や天井に施している。当日は多文化のイベントを開催、近隣の高校生（多くが外国ルーツ）も多く手伝っていた。運動場には畑があり、野菜を栽培、図書館以上の機能を発揮していることに驚いた。

○ジオタワー大阪十三（来年完成予定）内で予定されている図書室

ジオタワー十三は、阪急十三駅前に建設中のタワーマンション。この低層階に大阪市立図書館、私立専門学校図書館と同じフロアでまちライブラリーが入居予定。今回はマンションのモデルルーム内にあるまちライブラリースペースを訪問、話を伺った。

まちライブラリー、公立図書館、学校図書館が同居する事例は過去にない。それぞれの特徴を生かし、ターゲット客層が交わることで新たな交流が期待できる。

また、同一フロアに保育学童施設も併設。さらなる交流の場をクリエイトする計画。

正直、なぜ公立図書館の横にまちライブラリーを設置するのかよくわからないが、官と民がコラボレーションで本を通した街の活性化にチャレンジする意図は読み取れる。たしかに、図書館にはその効果が期待できるパワーを秘めている。

開館後に再訪したい。

○みんなの図書館サイクル

十三駅から徒歩10分、住宅街にあるまちライブラリー。本の循環、本をきっかけに人々が訪れ、モノコトが循環し、人が再訪するという想いを屋号に記した。1Fが約10坪の図書館、40センチの仕切りで区切り、ひと棚オーナー制度（2800円/月）で展開。九州関東のオーナーもあり、かなり広域的、当日はアロマ等癒し系のイベントが開催されていた。30分ほどの滞在だったがかなり多くの来客。十三の街に溶け込んでいる感じがして素敵な印象。2Fはフリースペース、中学校正門前の立地を生かし、地域の子どもの居場所として開放。

○本の部屋 TONTON

マイクロライブラリーサミットで話を伺った施設を訪問。阪急中津駅を降りて数分、長屋の狭い一角に存在。長屋全体がアップサイクルをテーマとしたテナントに特化しており、この本の部屋 TONTON も同様の考え。訪問時は残念ながら施錠されており、中の様子は拝見できなかったが、他のテナントの空気感と相まっていい感じが漂ってきた。

○犬山市への提言

今回は、主にミニライブラリー、まちライブラリーを中心に調査したが、図書が市民生活、街のコミュニティづくりに大きな役割を果たすことを改めてよく理解した。

今年度、市議会民生文教委員会あでも図書館をテーマにしているが、委員会では、にぎわいづくりとしての図書館の考え方への志向が強い気がする。それも大切だが、図書館本来の機能役割をベースにおいて考えていくことが大切であるという事を継続的に訴えていきたい。

楽田地区においては、ふれあい図書館、ふれあいセンター、青塚古墳、ヤギ農園、名古屋経済大学、総合高校、大縣神社、永泉寺など、地域の拠点として機能している施設が多くあるが、そのようなところに、少しずつでも、まちライブラリーの考えを浸透させ、図書による人と人とのつながりを築いていけるよう行動したい。また、楽田ふれあい図書館つばさの活性化にも、今回の出張で発見した事例を参考にして生かしていきたい。

以上